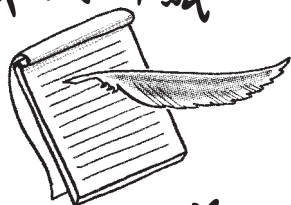


平成艸紙



おりおりの記

## 逃げない

前メリルリンチ日本証券  
会長

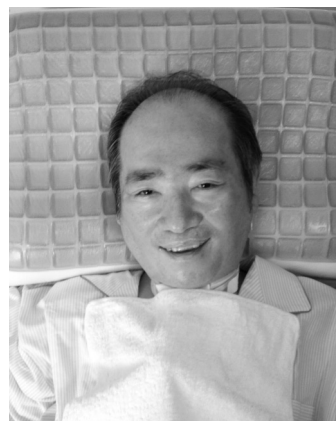
藤澤 義之

2003年の秋のこと、ある朝起きると口がムズムズしてうまく話せない。医者を訪ね歩き、最後に東大の神経内科辻教授から、「これは、肺と四肢等の筋肉が硬化し、動かなくなるALSという難病で、治療の術はありません。」と診断が下された。重々しい話だったが、ぼくはなぜか深刻に感じなかった。それは、身動きならない状態になるまで、まだ相当時間があるし、その問題を除けば、普通の寿命を全うできると思ったからだった。

それからは、今のうちにできることをやろうと、外国でのALSの治療法を探りがてら海外旅行をしたし、また家のリフォームにとりかかった。我が家はバリアフリーでなく、耐震、防火面でもお粗末で、病気が進むと生活が不便になるし、特に震災が来るとひとたまりもない。1年半ほどかけ、免震耐火構造、太陽電池による自家発電等を備えた自宅が完成した。よくしたもので、完成後間もなく病気が進みはじめ、経管栄養、人工呼吸器装着の最終段階に2年位の間に到達した。入退院を繰り返し、手術を何回かやり、やせ細って苦闘していた。その後は専ら在宅療養で、介護は家内をはじめ、ヘルパー、訪問医師、看護師、リハビリの療法士、歯科医師、歯科衛生士、マッサージ師等多数のかたのお世話になっている。いつも誰かが側におり、プライバシーがないほどだが、お蔭で安心して暮らせる。その熱意と気遣いに心から感謝し、人間としての幸せを感じている。

この病気になってはじめて気がついたのは、口がきけないことが、いかに苦痛かということであ

る。実際、他人の会話に参加できないと、寂しいを通り越し悔しい。さらに体の不具合を訴えようにも、声はおろか音すらでないと恐ろしくなる。このような事態を少しでも回避するための手段は



あるが、いずれも手足等が少しでも動くことが前提だ。ぼくの場合は、それも長く期待できないから、視力に頼ろうときめ、視線入力のパソコンを早くから導入した。このような手段の選択とか操作には、それなりの知識と経験が必要であり、幸いICT救助隊という頭がさがる活動をしているNPOに助けてもらった。以来、障害者のコミュニケーションの問題に深く関与し、今は全身不随の身だがICT救助隊の理事長を務めている。所詮NPOゆえ資金面での悩みは多く皆さまのご協力を仰ぎたい。

ぼくは、「逃げない」という言葉が好きだ。仕事でも頼まれごとでも、「問題は解決されるために存在する」の精神で逃げない気持ちでやってきた。お迎えが来たらどうする。生きていればこそこの「逃げない」だから、逃げるだけ逃げて、最後は「逃げない」ではなく「逃げられない」ということだろう。